

4月12日

「病院のお風呂にて、おじいちゃんとおばあちゃん¹がいっしょに風呂に入ってくれた。何も言わなかった。お風呂が一番こわい。2人とも何も言わず、立ったまま。お風呂に入り、髪も洗い、身体もあらい、身体が自分の身体でなくなった感じがした。石けんとシャンプーを持ち、いそいで2階で横になっていると気持ちが悪くなり、トイレに行くともどした。」

(2005～2010年に書かれた母の日記より引用)

両親の離婚後、私は母、祖母、2人のおばの4人の女性に育てられた。そして1991年、私が20歳になってまもなく母は統合失調症(精神分裂病)と診断された。発症後の母は言葉も行動も昔の母とはまったく違う別人のようで、家族と交わす会話も意味不明で支離滅裂だった。学生時代から仲良くしてきた母の友人たちは、彼女の言動が以前とは違うと感じると足早に去っていった。彼女がそれまで歩んできた人生は、家族の記憶と発症前に撮られた写真の中に漂うのみとなり、まるで一度に抹消されたかのようにだった。母の主な居場所は実家ではなく精神病院へと移っていった。

1999年春、4人の女性の長である祖母が死んだ。

家族は自分の記憶の中にあるまま永遠に不変だ、と道理なく思っていた私にとって、祖母の死は過ぎ去っていった時間を鋭く意識させる出来事となった。そこで、祖母の死後、私はニューヨークから東京に里帰りするたびにそれまで撮影することがなかった家族を撮影した。それらの写真の多くは、実家や母の入院先の病院、旅行先で撮影したものである。旅行先はほぼ毎年同じで、祖母を含む家族全員で唯一訪れたことがある箱根や日光、福島、京都など、母と2人のおばが若い頃から行きたかった場所が多い。

年老いていく親や家族を見てると、このまま年を取るのが怖いと思うときがある。生きてると自分がコントロールできないことにいくつも遭遇する。時間は無関心を装い、スピードを緩めることなく過ぎ去っていく。

母の人生は統合失調症を発症してからあっという間に変わった。それを間近で目撃した2人のおばと私は、自分の身にいつ何が起きても不思議はないことを常に意識しながら生きてきたような気がする。

写真はすでに起こってしまった事実と、これから起こり得る現実と私を向き合わせる。

「While Leaves Are Falling…」は、私の家族である3人の女性を18年に渡って記録した彼女達が生きてきた証であり、これらの写真は私にとって過去と現在の時間の往還を実現させてくれる大切な乗り物である。

¹母の両親である「おじいちゃん」と「おばあちゃん」はすでに他界。